

生物多様性保全に配慮した農産物生産

1. 研究の背景

近年、生物多様性保全への関心が高まる中、農業分野においても冬みずたんぼ米など生物多様性に配慮して生産された農産物（「生きものマーク（※）」農産物）が徐々に増えつつある。しかしながら、今後のさらなる生きものマーク農産物の生産推進のためには、取組事例の整理と農産物の高付加価値化のための要素を抽出することが必要である。本研究では、生物多様性保全に配慮した米（生きものマーク米）生産の取組事例全般について整理して定性的分析を行うとともに、その中で代表的事例として注目されている兵庫県豊岡市におけるコウノトリ保全に配慮した米生産を取り上げ、生きもの保全に関する属性が高付加価値化に結びついているのかを定量的に明らかにする。

2. 生物多様性保全に配慮した農産物生産の事例

生きものマーク米の生産事例はこれまでに全国で39事例が確認され、生産地は東北・北陸地方に多く関西・九州に少なかった。生産農家数および栽培面積については1戸の農家が1.5aほどの面積で行っているところから、150戸が集まり471.4haで取り組んでいるところまでさまざまであった。ただし、国内の米生産量からみれば生きものマーク米の生産量はご

くわずかである。主な保全対象生物種としてはコウノトリ、トキ、マガンなどの鳥類が多いが、これらの事例でも、実際には鳥類のエサとなる魚類や昆虫類なども保全しているものがほとんどである。

生きものマーク米の販売価格を同一産地の慣行栽培により生産された米（慣行米）と比較すると、5kgあたり1,000円以上の価格差があるものがある一方で、まったく価格差のないものもあった。価格差のない事例の中には、直販を利用し中間マージンを廃して利益を出しているものがある一方で、大量に生産しつつも慣行米との販売価格に差をつけられずに流通業者に卸しているものも見られた。また、価格の一部を生物多様性保全の費用として利用しているものもあった。

これらの事例から示唆されることとしては、以下の点を挙げるこ

とができる。まず、生きものマーク米の基準・定義を定めていない事例も見られ、これらの事例ではどれも慣行米との価格差別化ができていなかった。単に生きもの保全に資すると訴えるだけでなく、生きもの保全のために具体的にどのような生産・栽培方法を採用したのかを明確化することは、消費者に対し慣行米との違いを訴え、生きものマーク米の価格面での差別化を可能とする。さらに、生産・栽培方法の明確化は生産者に生きもの保全のために何をすべきかを示すことでもあり、生きものマーク米生産の取組拡大にも貢献する。

3. 兵庫県豊岡市におけるコウノトリ保全に配慮した米の高付加価値化要因の解析

兵庫県豊岡市におけるコウノト

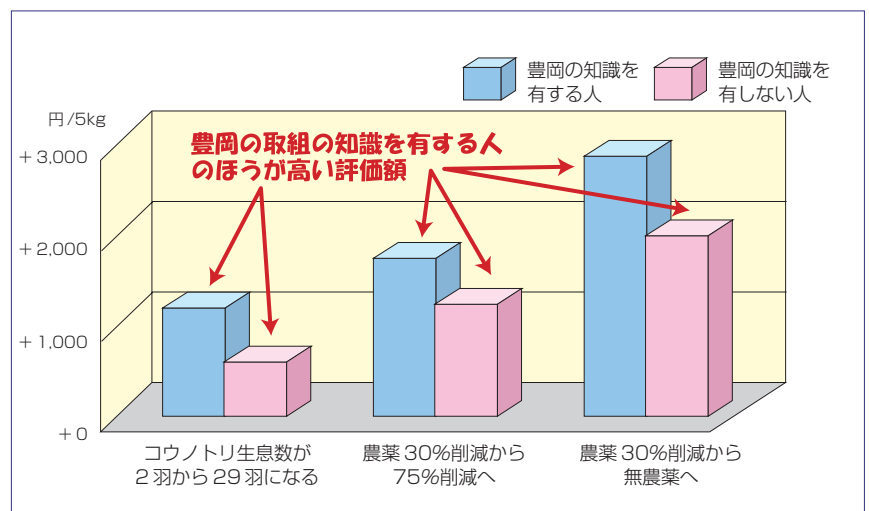


図 生物多様性保全の知識の有無による結果の違い

※「生きものマーク」とは、農林水産業の営みを通じて生物多様性を守り育む取組と、その産物等を活用した発信や環境教育などのコミュニケーション（必ずしもラベルを産物に貼ることを条件としているわけではない）を表す言葉。

の高付加価値化に関する研究

食料・環境領域研究員 田中 淳志

り保全に配慮した米（「コウノトリ育むお米」）生産について、どのような属性を増進すれば、消費者はより高く「コウノトリ育むお米」を買うのかを、「コウノトリ育むお米」の購入者を対象としたアンケート調査により分析した。

分析結果は表および図に示した（※）。コウノトリ保全や育む農法の知識を有する回答者もそれらの知識を有しない回答者も、農薬使用量の削減に多くの金額を支払ってもよいと考えていることが明らかとなった。これは、農薬使用量の削減が消費者にわかりやすい属性であることと、消費者自身にメリットがもたらされる属性であると認識されていることを反映した結果と思われる。また、コウノトリ保全や育む農法の知識を有する

回答者は、それらの知識を有しない回答者よりも追加的に支払ってもよい金額が大きい。また、水田で見かける生物数の増加については、知識を有する回答者だけが追加的な金額を支払うという結果が得られている。このことは、生物多様性保全の取組や意義を知ってもらうことで、「コウノトリ育むお米」をより高く買ってもらえることを示している。

4. 結論

以上の分析結果から、以下の3点が示唆される。第1に話題性もあり一般的に認識されつつある生きものマーク米であるが、生産すれば必ずしも高く売れるわけではなく、生産から販路までの戦略的

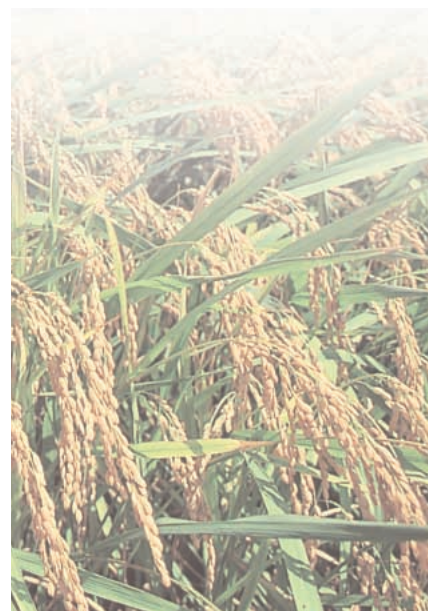
な取組が必要である。第2に具体的には、生きものマーク米の高付加価値化のためには、減農薬・減化学肥料や無農薬、有機栽培などの栽培上の差別化が必要である。これは、消費者への宣伝効果があるとともに、生産者に対し生きものマーク農産物の規格を明確化する手段としても有効である。第3に生物多様性保全の取組について消費者に広く知ってもらうことが米を高く買ってもらえることにつながっている。農業政策の視点からは、農業で行っている生きもの保全の取組やその意義を消費者に伝えることは、生きものマーク農産物の付加価値を高める上で効果がある。

表 コウノトリ保全に配慮した水稻生産の経済評価の結果

変化する属性	コウノトリ保全や育む農法の知識を有する回答者	コウノトリ保全や育む農法の知識を有しない回答者
コウノトリ生息数が2羽から29羽になる	+ 1,107円/5kg	+ 642円/5kg
水田で見かける生物数が現状の2倍になる	+ 532円/5kg	統計的に有意な結果が得られず
30%減農薬から75%減農薬へ農薬使用量削減	+ 1,604円/5kg	+ 1,161円/5kg
30%減農薬から無農薬へ農薬使用量削減	+ 2,767円/5kg	+ 1,863円/5kg

注(1) 評価額は、他の属性が同一で上記の要因だけが変化した場合に追加的に払ってもよいと考える金額（お米5kgあたり）を示す。

(2) 「統計的に有意な結果が得られず」とは、属性の変化への反応が見られないことを示す。



※ 分析上設定した仮定の影響と本分析の調査対象が一般的な米よりかなり高価な「コウノトリ育むお米」を購入している消費者であったため、必然的に高めの評価額となっている。

右記のとおりプレスリリースいたしました。 <http://www.maff.go.jp/j/press/kanbo/kihyo01/100409.html>